

マルナギナタハバチ

早春にアカエゾマツの新芽に潜るイモムシ（幼虫）。体長最大6~7mm。幼虫は腹脚がなく、胸脚もごく小さい。食害に気づく頃は幼虫がいないことがおおい。枯れた部分は中空で簡単に脱落し、途中で切断されたような枝が残る。

食害が何年も続くと枝が減少した異常な樹形になる。1990年頃からアカエゾマツ造林地で発生が目立つようになった。



1. 被害。1994/8/25。厚真町。



2. 老齢幼虫，体長7mm。1988/6/18。美唄市。



3. 交尾中の成虫。1995/5/18。厚真町。



4. 連年被害による樹形異常。1994/8/25。厚真町。

【学名】 *Pleroneura piceae*

【分類】 ハチ目 (Hymenoptera) , ハバチ亜目 (Symphyta) , ナギナタハバチ科 (Xyelidae)

【分布】 北海道。

【特徴】

幼虫は終齢で体長6~7mm、乳白色、円筒形で胸脚が小さく、腹脚を欠く。アカエゾマツの芽や若いシュートに潜る昆虫は他に数種ある。マルナギナタハバチの幼虫は腹脚がないこと、胸脚が短いこと、尾端がやや突出すること等により識別できる。また、新芽の枝の部分を実から葉だけ残して食べるのに対し、他の昆虫は枝の内部に潜るか、主に葉を食べる。

成虫は4～5mm。この仲間は雌成虫が腹部先端に長刀のような産卵管を持つことからナギナタハバチと呼ばれる。

【生態】

宿主：アカエゾマツ。トウヒ属の他の樹種では観察されていない。

年1回発生。成虫は5月に出現。雌成虫は膨らみ始めた芽に産卵管を突き刺して芽の中に卵を1個ずつ産む。孵化した幼虫は、まず芽の中を先端に向かって進み、次いで先端から枝の原基の部分だけを食べ進む。食害によりシュートの先半分から全体が失われる。幼虫は6月上旬頃に老熟し、土に潜る。土壌中に丸い部屋を作り、そこで蛹になり越冬する。中には幼虫のまま越冬するものもあり、これらは翌年に蛹になり再び越冬するものと推測される。

【被害と防除】

1992年に厚真町で初めて激しい食害が発見された。古くは珍しい種で大雪山や阿寒周辺などでわずかに採集されているだけであつたが、最近は道内各地で普通にみられるようになった。アカエゾマツ造林地の拡大が関係するかもしれない。

食害直後（6月頃）では食害された芽が枯れて目立つ。やがて枯死部は脱落し、先が切断されたような枝が残る。幹の頂芽を食害することは稀で、被害により複数の幹が立つことはない。しかし、激しい食害が何年も続くと枝が減少した異常な樹形になり、成長量も低下する。なお、市街地に植栽されたアカエゾマツでの被害は今のところ知られていない。

食害により木が枯れることはなく、成長量の低下も少ない。防除は普通必要とされない。

【文献】

*1994. 原秀穂. アカエゾマツを加害するナギナタハバチについて. 光珠内季報, 96: 13-15. (生態, 被害)

1995. Shinohara, A. The sawfly genus *Pleroneura* (Hymenoptera, Xyelidae) in East Asia. Jpn. J. Ent., 63: 825-840. (分類, 形態)

*1996. 原秀穂. アカエゾマツの新害虫マルナギナタハバチ. 森林保護, 254: 25-26. (生態)

*2000. Masaka, K., and H. Hara. Inter-tree variation and yearly fluctuation in the susceptibility of Sakhalin spruce *Picea glehnii*, to shoot-boring sawfly *Pleroneura piceae*. Ecography, 23: 547-552. (被害, 発生要因)

*2001. 真坂一彦, 原秀穂. 芽吹き早いアカエゾマツは食われにくい! -食害の受け方の個体差とその差が成長に及ぼす影響-. 北方林業, 53: 39-42. (被害, 発生要因; 上記英語論文の解説)

*の文献は北海道立林業試験場ホームページの「北海道立林業試験場・研究成果文献データベース」で見ることができます。

北海道立林業試験場・緑化樹センター

マルナギナタハバチ habahoka/marunagi/
kaisetuh.htm

「文章」原秀穂, 北海道立林業試験場, 1996/4/25.
higaieda.JPG, yochu1.JPG, seichu1.JPG, higai.JPG

「写真1～4」原秀穂, 北海道立林業試験場, 1988-1995.

「写真個体群の種の同定」篠原昭彦博士, 国立科学博物館, 1994.